

ネパールにバイオトイレ

今夏世界遺産寺院に設置

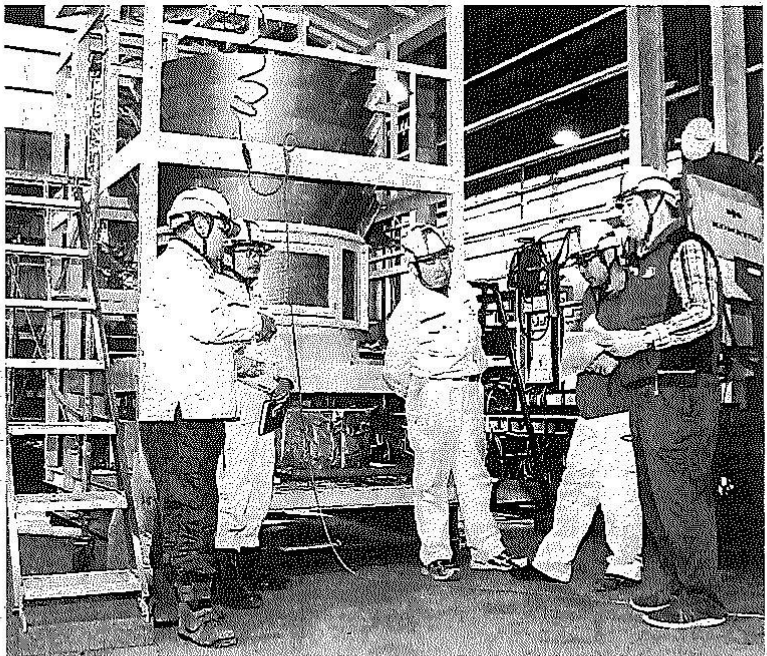
都留文大・渡辺教授ら

都留文科大の渡辺豊博特任教授が事務局長を務めるNPO法人グラウンドワーク三島(静岡)などは今夏、ネパールにある世界文化遺産パシュパティナート寺院にバイオトイレを設置する。寺院内を流れるバグマティ川は、し尿などによる汚染が問題になっていて、設置は2017年にネパール側から要請を受けた。北杜市の企業が処理槽製造を担当したトイレの台を設ける予定で、渡辺さんは「汚染軽減に役立てるとともに、現地の人々の環境への意識を養えるきっかけにしたい」と話している。

〈手塚美菜子〉

ヒンズー教のパシュパティナート寺院は1979年、「カトマンズ盆地」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録された。渡辺さんによると、

バグマティ川はヒンズー教徒が沐浴する「聖なる川」で、20年ほど前までは清流だったが、現在ではヘドロがたまり悪臭を放っているという。



設置に向けて話し合う渡辺豊博さん(右)やタマン・ラーナバットさん(左から2人目)と、バイオトイレの処理槽(奥)

北杜市高根町上黒沢

事業はNPO法人と大月市のネパール日本友好協会が2015年に企画。同年4月に現地で起きた大地震の影響で延期となり、18年から設置に向けた準備を進めてきた。

バイオトイレは排せつ物を水と酸素ガスに分解し、水はトイレの洗浄水として再利用できる。処理槽は1日に約400人分を処理できる。渡辺さんは知人の紹介で、バイオ

トイレの製造を北杜市の伸和鉄工(佐野智一社長に依頼。佐野社長は「組み立てや運搬をしやすいよう工夫した。素晴らしいプロジェクトに参加できてうれしく」と話す。

ネパールからは友好協会スタッフのタマン・ラーナバットさんが来日し、1カ月間、たり製造過程を視察した。ラーナバットさんは「1日にこだわる日本の職人は素晴らしい。学んだことを生かし、いつかネパールで造って普及させたい」と話す。

7、8月に設置する予定。渡辺さんは「バイオトイレは富士山でも活躍している。いずれはヒマラヤでも設置したい」と意気込んでいる。